

エシカル協会 2026 年 第 2 回法人会員ミーティング

東京サーキュラーセンター見学会 開催レポート

2026 年 9 月 7 日、株式会社 ECOMMIT が運営する東京サーキュラーセンターを訪問しました。本レポートでは、当日の見学内容と参加者の皆さまから寄せられた感想をご紹介します。

開催日	2026 年 9 月 7 日 (月)
訪問先	株式会社 ECOMMIT 東京サーキュラーセンター (東京都西多摩郡瑞穂町)
ご説明	株式会社 ECOMMIT 上席執行役員 CCO 坂野 晶 様
ご参加企業様 敬称略/あいうえお順 6 社 9 名	株式会社三栄コーポレーション、セイコーグループ株式会社、株式会社 Future Vision、株式会社山櫻、株式会社ロイヤリティマーケティング、ワンネスアース株式会社

見学会の概要

今回の見学会は、株式会社 ECOMMIT の東京サーキュラーセンターを訪れ、資源回収後の選別、再流通、再資源化の仕組みへの理解を深める機会として開催しました。

株式会社 ECOMMIT 上席執行役員 CCO 坂野 晶 様からは ECOMMIT の事業についてお話しいただいた後、2 グループに分かれてセンター内を見学し、最後に感想の共有と質疑応答を行いました。

センターでは、アパレル店舗や大型レジデンスに設置された PASSTO BOX と、宅配 PASSTO から回収された、衣類、家電、玩具などの選別、ウエスや再生原料への資源化、国内販売、海外輸出、ネット販売、回収品のデータ管理まで、循環の一連の工程を拝見しました。

当日のスケジュール

9:20	新宿センタービル付近を出発
10:50	東京サーキュラーセンター到着
11:00~11:05	エシカル協会 末吉より挨拶と参加企業紹介
11:05~11:20	株式会社 ECOMMIT 坂野様によるご説明
11:20~11:55	センター内見学
11:55~12:10	感想とコメントの共有
12:15	見学終了 マイクロバスにて移動
14:00	新宿センタービル付近に到着

見学会での主な説明内容

循環インフラの必要性

当日のご説明によると、日本では年間約 50 万トンの衣類ごみが発生し、そのうち 62%が廃棄、30%がリユース、8%がリサイクルに回っています。生産、消費、廃棄のインフラに比べ、回収した品物を循環させるためのインフラは、依然として不足しているとの問題提起がありました。

ECOMMIT は、「Amazon の逆版」ともいえる回収と循環の仕組みを目指しており「ビジネスが生み出した大量生産、大量消費、大量廃棄を、ビジネスの力で変える」ことをミッションとして掲げています。

PASSTO と回収網

PASSTO は、「PASS」と「TO」を組み合わせた名称で、不要品を次の人や用途へつなぐサービスです。全国約 8,000 か所の回収ボックスに加え、LINE ヤフー社との連携による宅配 PASSTO を展開しています。回収量が少ない拠点では宅配便も活用し、回収品を効率的にセンターへ集約していました。

人の目利きと多様な出口

プロピッカーは、回収品の素材、状態、季節、柄、ブランド、国内外の需要などを見極め、それぞれの行き先を判断します。夏物や華やかな柄は暑い地域向け、冬物や有名ブランドは国内向けとするなど、次の使い手を想定した選別が行われていました。元アパレル従事者など、衣類への関心と知識を持つ方が多いことも特徴です。

リユースに適さない品物も、ダウンの羽毛、ウエス、反毛、再生原料、家電部品などとして活用されています。また、Yahoo!オークションへ出品する商品は、梱包後に QR コードを付け、一点ずつ管理されていました。

データ活用と DX

回収品がどこから、どの程度集まったのかをコンテナ単位で記録し、工程のデータを蓄積しています。人の目利きを中核としながら、データ分析と DX によって、選別の効率化、回収方法の改善、今後の事業展開につなげていく考えが示されました。

海外流通における配慮

海外輸出用の衣類は、取引先の希望や現地の需要に合わせ、商品群ごとに圧縮梱包されています。日本側の不要品を一方向的に送ると、現地で販売できず、在庫や処分の負担を生むことになるため、現地で必要とされるものを届けることまで含めて、循環の仕組みを設計しています。

質疑応答

リチウムイオン電池への対応

発火や爆発のリスクがある製品は、回収不可品として明示する場合があります。ECOMMIT の回収では、ごみ収集車のような圧縮工程を設けず、品物を丁寧に運ぶことで、圧力に起因する火災リスクを抑えて

いるとのご説明がありました。

プロピッカーの採用と適性

元アパレル店員など、衣類が好きな方からの応募が多く、大量生産、大量消費のサイクルに販売側として関わった経験から、今後は循環を担う側になりたいと志望する方もいらっしゃるそうです。衣類への関心や知識は、目利きとして活躍するうえで重要な要素とのことでした。

ウエスから紙資材への可能性

株式会社山櫻様からは、白い古Tシャツからつくられるウエス「白メリ」を紙素材へ転換できる可能性について質問がありました。坂野様からは、現時点では想定していなかったとの回答があり、法人会員企業様との対話から新たな可能性が生まれる場面となりました。

参加者の声

- 回収したものを手間をかけて分別し、いかに活用するかまで、しっかりと考えられた事業であることがよく分かりました。以前から言われている「混ぜればごみ、分ければ資源」を実現していると感じました。
- その規模感や工程の一つひとつを実際に拝見することで、資源循環を支えるインフラの重要性を改めて実感しました。また、プロピッカーの皆さまが「古着を大切に仕事に携わりたい」という思いを持ち、誇りをもって働いていらっしゃるというお話を伺い、多様性や働きがいのある職場づくりについても改めて考える機会となりました。
- 心に残ったのは、プロピッカーの方々の「洋服への愛情」でした。「これはまだ誰かに着てもらえる」「この服なら、こんな場所で活躍できる」。そのように、一着一着の「次」を考えているように見えました。
- 今回の見学を通じて、サーキュラーエコノミーの実現は決して遠い未来ではなく、着実に前進しているのだと感じました。

見学会を終えて

今回の見学では、回収された衣類や日用品が選別され、次の使い手や用途へつながる過程を具体的に知ることができました。人の目利き、国内外の販路、企業との連携、物流、データ活用が、循環のインフラを支えています。

坂野様からは、このようなリユースやリサイクルの仕組みがあっても、たくさん生産し、購入すればよいわけではなく、3Rの中で最も重要なのはリデュースであるとのメッセージがありました。循環を知ることとは、「本当に必要か」「長く使えるか」と、購入前の選択を見直すことにもつながります。

ご案内くださった株式会社 ECOMMIT の皆さま、ご参加くださった皆さまに、改めて御礼申し上げます。